大 人 の 階 段

同志社高等学校２年　岡　本　実　樹

2007年夏、わたしは「世界こどもECOサミット」に日本人代表として参加した。たった１週間のプログラムだったが９ヶ国から集まった23人の仲間達と過ごす毎日はそれまで経験したことないほど充実していて刺激的だった。あの１週間があったからこそ、その後「日仏交流こども科学バカンス」や学校からのプチ留学に対し積極的なわたしになれたといっても過言ではない。

そして、ECOサミットつまり初めての国際交流から４年、もういつのまにか４年も経ってしまった今年の夏。ある、懐かしい方から連絡があった。それはECOサミットでお世話になったJamesさん。なんと、彼の会社が協賛し10月に中国で行われる「ESDのためのKODOMOラムサール無錫」に応募してみないか、推薦してあげよう、というのだ。高校に入ってからは今までの交流で知り合った海外の友達とのメールや手紙のやり取りしか「国際交流」の機会がなかったわたしは、もちろん、応募することに決めた。

しかし応募用紙を見た途端、わたしは今回のメンバーに選ばれるのは難しそうだと感じた。なぜなら募集対象となっていたのはエコクラブやNGOに所属している人、これまでにラムサールセンターで活動したことがある人、だったからである。2007年のECOサミット、2008年の科学バカンス以来環境問題や国際交流に興味を持ち続けそれらの経験を糧に日々勉強してきたわたしだったが、あいにくどこの団体にも属していなかった。だが、わたしはどうしても諦めたくなかった。中国行きだなんて、しかも日本人だけで行くお遊びの旅行ではなく海外の仲間達と一緒に勉強できる機会なんて、そうめったにあるものではないからだ。そこでわたしは、ラムサールセンターでの活動経験はないけれど環境問題と国際交流に興味があること、この機会に自然環境について世界の仲間達と意見を交流したいと思っていることを精一杯書き綴り、祈るような気持ちでラムサールセンターに送った。締切日前日のことである。

そして３日後、早速に結果が届いた。……合格。募集対象外からのスタートだったこともあり、飛び上がるほど嬉しかった。

さて、今回の応募から合格までを経て新たに気づいたことが３つある。

まず、思い続け努力し続けていればチャンスは必ずめぐってくるということ。今回、わたしはラムサールセンターの募集対象外だった。そのような状況で選んでもらえたのは、James さんたちの推薦はあったもののわたしが中学での経験以来環境問題や国際交流について興味を持ち続け、海外の仲間と会える日を夢見て勉強し続けていたことも少なからず影響したのではないかと思う。願えば叶う、本当のことだと思う。願い続け努力すれば思いがけない形で夢は叶う。

２つ目は、この世に偶然なんてないのだということ。ECO サミットの日本人代表に応募しようと思ったのは、中学時代かるちゃんぷる部（カルチャーをちゃんぷるするクラブ、つまり海外からのゲストと交流し世界の文化を知るクラブ）に入っていたからだった。そして ECO サミットに参加したから James さんに出会った。初めての海外の同年代の仲間達との交流に戸惑いながらも自分なりに精一杯取り組んだから James さんの記憶に残っていた。ECO サミットや化学バカンス以来、環境問題について関心を持ち身近な小さなことに取り組み、また国際交流に興味を持ち続けていたから、KODOMO ラムサール無錫のメンバーに選んでもらうことができた。このようにして考えると、全てのできごとは偶然ではなく必然だったのだなとつくづく感じる。これらのどの要素が欠けたとしても、この今のわたしはいないだろう。

最後に３つ目は国際交流とは卵であるということ。神様から与えられた１つ１つの機会というのはそのときだけおいしい玉子焼きではない。卵である。１つの国際交流がきっかけとなってひよこが産まれ、交流から得たものを糧にして毎日を生きることでひよこが鶏になり、ある日突然に新しい卵が生まれる。だからきっと海外の仲間達と交流している時間だけが国際交流ではないのだ。キリスト教の授業で習った印象的な聖句がある。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」つまり、交流のひとときは単なるスタート地点であり、そこからわたしが止めない限り「国際交流」は永遠に続いていくのだ。

出発まで残り１ヶ月…。KODOMO ラムサール無錫での１番の目標は自然環境について世界の仲間達と積極的に意見を交換することだが、実はわたしがひそかに目標としていることがもう１つある。それは、同年代の仲間をたくさん作ること。将来は海外で活躍したいと考えるわたしにとって、海外の同年代の仲間たちは目標であり相談相手であり、ときにはライバルでもある。そうやってお互い刺激しあい影響されあう中で将来の夢を見つけ、大人になっていくのだとわたしは考えている。一期一会、同じ出会いは二度とめぐってこないから、全ての出会いを大切にしたい。

国際交流はわたしにとって大人の階段だ。また一段登るため、今日もわたしは世界中の仲間達に思いをはせながら、精一杯に生きるのだ。